

【銀河中東戦争】

我が心の不滅の艦 -宇宙戦艦ヤマト・ハイド-編-

【第一稿】

遠野 秋彦

本作の全てはフィクションであり、宇宙戦艦ヤマトの正式な解釈ではないし、正式な解釈に準拠したものでもない。

また、地名、人名、歴史、宗教、教義などの全ては創作であり、フィクションである。

プロローグ

ドアがノックされた。

真田は顔を上げた。

「入りたまえ」

挨拶して入ってきたのは、親善航海の名目で地球に来ていたシャルバエル星の巡洋艦ハイドー艦長、ユーライアスだった。

「ユーライアス艦長。まあ座って下さい」

真田はソファを勧めた。

「おかげで助かりました。ヤマトには、ボラー戦役時にシャルバートの技術が使用されて改装された箇所があり、シャルバートの技術情報は大変有益でした」

「いえいえ。ヤマト復活計画の9割以上は真田さんの熱意でしょう。我々は僅かなお手伝いをしただけです」

「秘密を守れるとお約束頂ければ、修復中のヤマトを特別にお見せしましょう」

「よろしいのですか？」

「秘密厳守ですよ」

「分かっています」

真田とユーライアスは連絡艇に飛び乗って軌道上の氷塊アクエリアスに移動した。

アクエリアスの中心部の氷は融解しており、その中でヤマトの修復工事は進んでいた。

ヤマト横の作業指揮所の窓からユーライアスはヤマトを見上げた。

「これは凄い巨大艦だ」

「重量物を運搬するのに有利なので、現在は水を抜いておりません。最終艤装の段階では水を抜いて空気を満たす予定です」

「地球が同盟国で良かった。あれとは戦いたくありません」

「何をご謙遜を。ハイドロコスモジェン砲の技術をベースにした貴官の巡洋艦ハイドーこそ、いざとなれば恒星を炸裂させることができる最強兵

器でしょう」

「しかし、威力がありすぎて恒星に向けて撃つことは厳禁ですし、恒星以外の天体に向かって撃っても効果がありません。ただ、超光速で伝播して直進性が高いので、対空兵器としての適性があるとして搭載されているだけで、実際にはあまり決定力がないのですよ」

「その応用もシャルバエルの技術力の見事さだと思う。確かに巡洋艦ハイドーにハリネズミのように装備された対空用主砲副砲の小型ハイドロコスモジェン砲を見ると、地球の航空隊である艦への攻撃は行いたくない」

「ところで、真田さん」

「なんでしょう」

「この際だから、本音もお聞かせ頂きたい」

「本音？ 我々はシャルバエルの味方ですよ。隠し事などは……」

「この宇宙戦艦ヤマトの艦長を務めた古代進は銀河崩壊後の混乱期にデスラーとの連合を主張して、シャルバエルとの連合を主張した揚羽コンツェルンと対立したと言います。そして、古代進と一緒に真田さんもこの艦に乗っていた……。もしや、本当はシャルバエルとの連合には反対なのでは？」

「ユーライアス艦長」と真田はヤマトを見上げた。「私の敵は、科学に潜む傲慢さですよ。人は何もかも世界を理解したと思って慢心してはいけない」

「では古代進と同じ意見ではないと？」

「彼の理想主義は理解できる。デスラーの救援が無ければ地球はアクエリアスの水で水没していたのも事実なので、恩人に報いたい彼の気持ちは誇らしい」

「では……」

「だが、シャルバートの技術で地球が救われたのも事実だ。私にはシャルバート人に冷たく接することはできない。何かあれば連絡を寄越してくれ。すぐに誰かを派遣する」

その時、ユーライアスはこの真田という科学局局長が、冷たい外見と裏

腹に熱い男だと確信した。

第1章 消失

西暦 2203 年に異次元から出現した銀河が引き起こした惨劇は、まさに銀河系に最大の惨劇をもたらした。超大国ボラー連邦は壊滅し、対抗勢力として勃興しつつあったガルマン・ガミラスもこれで壊滅した。しかし、全ての惑星が壊滅したわけでもないし、全ての人々が死に絶えたわけでもなかった。巨大国家が消滅した結果としての群雄割拠の混乱時代が始まったのだ。

この時代、ボラー連邦とガルマン・ガミラスの支配に抑圧されていたあらゆる勢力が自己主張を開始したと言って良い。

しかし、その中でも特に台風の目になったのは、シャルバート信者の過激派が、約束の地【惑星シャルバエル】に建国した国家だった。本来温厚なシャルバート信者であるが、やはり人の集団である以上派閥が存在し、経典の解釈にも揺れがあった。そして、過激な一派は技術の利用をためらうことはなく、経典に記された理想郷の実現を武力で実践した。それが、惑星シャルバエルであり、首都シャルバレムであった。

しかし、いきなり異教徒に踏み込まれ、惑星を奪い去られたと思う勢力もあった。

殉職したラム艦長とイス将軍を神としてあがめるラムイス教徒達だった。

ラムイス教徒の勢力は細かい国家に分割されていたが、アルブ連盟を結成してシャルバエルへの攻撃を開始した。それは銀河中東部を巻き込む大戦争に発展した。

銀河第一次中東戦争の始まりである。

シャルバエルの巡洋艦 HMS ハイドローは、電子戦戦闘艦 HMS リトルマザー2 を率いてワープアウトした。

「ワープ終了しました。全艦異常ありません。後続のリトルマザー2 からも問題無しとの報告です」オペレーターが報告した。

「よし。もうすぐ我が家だ。羽を伸ばせるぞ」ユーライアスは言った。

こうしてシャルバエルで安心して羽を伸ばせるのも四次に渡る銀河中東

戦争が終結したからだ。

そもそも、悠長に最新鋭艦のハイドーが虎の子の電子戦用艦を連れて地球に表敬訪問できるのも、和平のおかげだった。

「待って下さい」オペレーターが叫んだ。「リトルマザー2 が妙なことを言っています」

「妙なこと？」

「シャルバエルが見つからないとかなんとか」

「惑星がそう簡単に消えるわけがなかろう。仮に砕けても破片が残るはずだ」

「破片も残さず消えてしまったとか」

「艦長よろしいですか？」と航海士が叫んだ。

「なんだ。言ってみろ」

「外惑星の航行管制局と連絡が取れません。航路の指示を受けられません」

「なんだと。平和ボケして寝ているのか？ 他のステーションと連絡して見ろ」

「それがダメなんです」

その時、ユーライアスは背筋が凝った。

まさか。

あれでは。

真田が語っていた重核子爆弾。

太陽系の基地を1つ1つ黙らせながら地球に侵攻した悪魔の兵器。

「星系内の全ての基地と宇宙船に連絡を取れ」ユーライアスは指示した。

「あの。こちらの話に戻ってよろしいですか？」

ユーライアスは深呼吸してオペレーターに視線を戻した。

「分かった。それでシャルバエルが消えたとはどういうことなんだ？」

惑星が消えるという話は真田からも聞いていない。

いや待て。1つだけ聞いた。

ディンギルがアクエリアスをワープさせた話だ。

しかし、重核子爆弾を使ったのは暗黒星団帝国だ。ディンギルではない。
しかも、どちらも既に滅んでいる。

どういうことだ？

「リトルマザー2 が妙なことを言っています。ブラックホールに吸い込まれた可能性ありと」

「バカを言え、このあたりに惑星を吸い込めるほど大きなブラックホールなどあるわけが……」

「ですよ」

それよりも、惑星をワープさせたという話の方がまだ説得力があった。

何しろ、ユーライアス自身が訪問した場所は、そうやってワープさせられて地球の近くまで来たアクエリアスの慣れの果てなのだ。

それなのに、ブラックホールとは飛躍のしすぎだ。

しかし、星系内に生存者はいなかった。

どの基地も全て死体の山だった。

そして、惑星シャルバエルは消えてしまった。

どこにもない。

残骸もない。

交戦の跡はあった。気の利いた指揮官は交戦を試みたようだ。

しかし、敵の正体を調べる手がかりはなかった。

観測基地から過去のデータだけは回収できた。

リトルマザー2 でさっそく分析が開始された。

「やはり、アルブ連盟の仕業でしょうか？」副長が言った。

「だが、キャンペロケット合意でアルブ連盟をリードするベルデルとの停戦合意はできているのだ。彼らには戦争継続する力が残っておらず、これが銀河第五次中東戦争である可能性はまずない」

「そうですね」

「そもそも、アルブ連盟には重核子爆弾を運用するノウハウも、惑星を手品のように消す技術もないよ」

「確かに……」

その時、ハイドーのヒロイン、美少女ハーマイオニーが艦長席に来て敬礼した。彼女は、頭にツノが生えた亜人種であり、地球では「鬼鬼」とはやし立てられたが、そのあたりは地球の後進性だった。シャルバート信者は信仰さえあれば誰でも信者の仲間だ。人種差別は存在しない。ハーマイオニーのような鬼娘ですら、マザー・シャルバートに祈れば誰も差別などはしない。

もっとも……。シャルバート信者の中にも派閥があり、対立が存在するのも事実だ。とても皮肉なことだ。ツノがあっても差別はしないが、些細な違いは差別する皮肉。

しかし、これが敵対派閥の仕業とも思えない。

彼らにも惑星を1つ消してしまうほどの芸当はできないのだ。

「なんだね、ハーマイオニー」

「シャルバエルが消えた原因がブラックホールだとすると、1つだけ可能性があります」

「なんだね？」

「このあたりにブラックホールなど存在しないはずだというのはその通りなのですが、実は1つだけ例外があります」

「まさか。そんな話は聞いていないぞ」

「銀河が中心方向から来た移動性のブラックホール BH999 です」

「しかし、シャルバエルを飲み込むほど接近するのであれば、警報が出ていたはずだ」

「それは分かりません。しかし、BH999 は第1次移住計画の目的地として選ばれた星系をまっすぐ目指していました」

シャルバエル開拓の計画は、当初別の惑星を開拓する予定だった。

聖典の約束の地はそちらだと思われていたのだ。

だが、単純な読解ミスが判明し、数光年離れたこちらの惑星が約束の地だと確定した。

もし、ミスが判明していなかったら、ブラックホールに飲み込まれてい

たわけか。

いやまで。

「まさか」

「正体不明の敵は、第1次移住計画の計画書をなぜか見ていて、シャルバエルに向けてブラックホールを撃ち込んできた。しかし、真のシャルバエルがそこではないと気づいて、最終段階で進路を再調整してシャルバエルを飲み込んだ。そう考えれば辻褄が合います」

「馬鹿な。物理的にあり得ない」

「艦長」

ハーマイオニーはまっすぐユーライアスの目を見た。

「なんだね」

「確かに物理的にあり得ません」

「そうだ」

「ですが、それはそれがブラックホールだったらの話ですよ?」

ユーライアスは眉をひそめた。

「何が言いたい」

「ブラックホールに偽装した別の何かだったらどうでしょう?」

突然、ユーライアスは気づいた。

重核子爆弾の問題も同じだ。

重核子爆弾を偽装した別の何かだったらどうだろう。

滅んだはずの暗黒星団帝国の技術が使われたと悩む必要が無くなる。

矛盾が解けるのだ。

第2章 奇襲

しかし、ユーライアスには思考を巡らせる時間は無かった。

アルブ連盟のベルデルの戦艦がワープアウトしてきたのだ。

しかも、大型の新型だった。

「馬鹿な。ベルデルに、あんな大型艦を新造できるドックは残っていないはずだ」

「しかし識別信号は間違いなくベルデルです」

ベルデルの戦艦は前置きなく、いきなり射撃してきた。

戦時下ならともかく、平和な時にはあり得ない状況だった。

ベルデルの戦艦に近かったリトルマザー2の船体をビームが貫いた。

一瞬で船体が折れ曲がり、ほとんど防御力のないリトルマザー2はそのまま沈んだ。

「緊急防壁展開!」とユーライアスは叫んだ。「全艦戦闘配置。だが逃げることを優先しろ。航海士、回避航路算定。全速で逃げれば、こっちの方が速いはずだ」

「ベルデル戦艦、艦載機を発進させています」

「艦載機で頭を抑える気か。だが相手が悪かったな。対空システム起動。ハイドロコスモジェン砲の遠距離射撃で全機仕留めろ」

「リトルマザー2の照準支援が受けられないので、命中精度が落ちます」
砲手が叫んだ。

「そこは腕と経験でなんとかしろ。銀河第一次中東戦争から従軍しているのが自慢なんだろう?」

「了解です」

「ただし恒星には当てるなよ。あれを吹っ飛ばすわけにはいかん」

「任せて下さい」

ベルデルの大形戦艦は、火力はあっても鈍速であった。

巡洋艦のハイドーは十分に逃げ切れた。

艦載機対策は、対空巡洋艦のハイドーにとってまさに得意中の得意であった。連装5基計10門のMark I 13.3cm 50口径 ハイドロコスモジェン砲

が火を噴いた。コンパクト化された改設計の砲だが、対空用としては最強だった。いくら恒星以外に撃つと威力が激減と言われても、ろくな装甲を持たない艦載機には十分過ぎた。

瞬く間に追撃する敵機の数は一減した。

「かつて存在したという白色彗星帝国の対空ミサイル艦ガトランタ級とどちらが強いのですかな」砲術長は余裕の軽口を叩いた。

「ガトランタ級は全艦戦没した。相まみえることはあるまい」ユーライアスは答えた。「それより地球に連絡を取った方が良いでしょう。少なくともキャンプロケット合意が反故にされている。そうなればお膳立てした地球の顔も立たなくなる。それに真田には恩がある。事態は伝えておきたい」

「ダメです。妨害されていて連絡できません」

「十分に距離を取ってワープして逃げろ。逃げ切れれば、通信可能になるはずだ」

だが、それは不可能であった。

別の戦艦がハイドローの前にワープアウトしてきたからだ。

「フリーデか!」ユーライアスは新たな敵艦を見て腰を浮かした。

さっきはベルデルだったが、今度はフリーデの宇宙艦だ。

どちらもアルブ連盟だ。

「艦長!」誰かが叫んだ。

「撃ちまくれ! 運が良ければ抜けられる!」ユーライアスは叫んだ。「マザー・シャルバート、我らに加護を!」

だが、嫉妬深い運命の女神は彼らに微笑まなかった。

彼らはマザー・シャルバートにしか祈らないからだ。

第3章 喪失

かつてハイドーだった残骸が宇宙空間に浮かんでいた。

乗組員の半数以上が死に、10門の主砲は全て破壊されていた。撃てるのは副砲が1門のみ。イスカンダル・地球技術の波動エンジンも既に止まり、補助エンジンが1機だけかろうじて動くだけだった。もちろん、ワープはできない。

ハイドー艦長ユーライアスは、最低限のケガの治療を受けると、出頭を命じられた。

ユーライアスが連行されていくと、フリーデ戦艦とベルデル戦艦の艦長が一緒に待っていた。

「さて、おそらくハイドーが最後のシャルバエル艦だ。乗組員は最後の生き残りだ。それを捕縛したことで、君たちは満足かね?」

ベルデル艦の艦長が言った。「君が言いたいことは分かる。我々がキャンプロケット合意に反して攻撃したと言いたいのだろうか?」

「違うのかね?」

「その通りだ。その点は謝る必要がある」

「謝るぐらいならなぜ攻撃してきた。アルブ連盟は嘘つきの集まりなのか?」

「その前に訂正しよう」

「攻撃などしていない、身を守っただけとでも言うのか?」

「そうではない。我々はアルブ連盟ではないのだ」

そこでユーライアスは始めて、この異常事態の真の理由が別に存在することに気づいた。

これは銀河第五次中東戦争などではないのだ。

ではいったい何だというのだ。

「アルブ連盟内部にもいざこざは多い」

「知っている。いざこざが多いから我々シャルバエルが勝つ」

「そのいざこざを力尽くで押さえ込んでくれる力強い国家がアルブ連盟に加盟したのだよ」

「どこだ？ エトスか？ いや、あそこは誇りが高いだけで力尽くは趣味ではないはずだ

「そうです。エトスではありません」

「ではいったい」

「SUS です」

「聞いたことがないな」

「新興勢力です。ですが、どこかで力を付けた老舗の別名らしく、アッという間にアルブ連盟は SUS の支配下に置かれました」

「まさか」

「アルブ連盟は発展的に解消され、新しい後継組織が産まれました」

「アルブ連盟はもう存在しない……だと？」

「ええ」

「新し組織はなんという名前だ？」

「ウルブ連合です。しかし、SUS はそれでは短すぎて有り難みがないので、もっと立派な名前に変えろとうるさいですよ」

「大連合的な？」

「ええ。大ウルブ連合とか、大星間国家連合とか、そんな名前の案が出ていますよ」

「話は分かった。だが、キャンプロケット合意はシャルバエルとベルデルの間で結ばれた条約だ。それを反故にする理由などあり得ない」

「それがあるのだよ、ユーライアス艦長」

「まさか」

「我々は、SUS に脅されているのだよ。母国を破壊するとね」

ユーライアスは何も言えなくなった。

何が起きているのかは明白だった。

SUS という新しいプレイヤーが参入して、ゲームのルールが変わってしまったのだ。

「キャンプロケット合意はあくまで主権国家ベルデルが相手のものであった」とベルデル艦の艦長は言った。「だが、今のベルデルは事実上 SUS の

属国だ。この戦艦の建造設備も全て SUS からの供与だ。戦艦を作る設備は提供するから SUS のために戦って死ねということだ」

「そこまでとは思いませんでした。君たちのために祈ろう。マザー・シヤルバート……」ユーライアス艦長は床に膝まついて祈った。

「それは我々の神とは違うが、祈ってくれたことは感謝しよう」

「ラムイス教徒がそれを言うのは不味くないか？」

「残念ながら我々は既にラムイス教徒ではない」

「というと？」

「SUS が我々の新しい神なのだよ。ラムイス教の崇拝は全て禁止された」

「我々にも、ガルマン・ガミラスから信仰を抑圧されていた過去がある。ガミラスに神は二人いないとまで言われたのだ」

「知っている。我々もボラーから信仰を禁じられた過去がある。ボラーの科学崇拝は、宗教というものを一切認めないのだ」

「ならばお分かりになるだろう」とユーライアスは言った。「神から我々に課せられた義務があり、それを果たす手段がある。我が信仰に従い、義務は果たさねばならない」

「その義務とは、星間国際法に則って士官待遇で捕虜になることではないのでしょうか」

「もちろん」

ベルデル艦の艦長とフリーデ艦の艦長は目と目を合わせて合意した。

「君の望みを可能な範囲で叶えよう」

第4章 花火

ハイドーはゆっくりと二隻の敵艦から離れていった。その二隻はベルデル艦とフリーデ艦だ。ベルデル艦はSUSから供与された最新ドックで建造されたもので、SUSの技術を使用した新型だ。フリーデ艦は艦齢の古いロートルだったが、大型であり、戦闘力は侮れなかった。

この敵艦二隻は残敵掃討任務でこの星系に留まっていたもので、同様の任務に従事している戦艦が星系内に十隻以上いるという。緊急信号を出せば、それらの戦艦は即座に集まってくる。

それに対して、ハイドーに残されたのは補助エンジン1機と副砲1門のみだった。乗組員は半数にも満たない上に、負傷者も多く、とても通常の戦闘力は発揮できなかった。

「本当にそれでいいのかね?」とベルデル艦の艦長が通信連絡でユーライアス艦長に告げた。「その巡洋艦は既に戦える状況ではない」

「それでも戦うことを神は望んでおられる。戦う手段があるうちに異教徒に屈してはならない」

「私が大学で学んだシャルバート信仰はもっと温厚なものだったが」

「君たちの宗教に流派があるように、こちらにもあるのだ」

「主砲の1門ぐらいなら、修理する時間的な猶予を与えて良いのだぞ」

「大丈夫。ハイドーにはまだ秘密兵器がありましてね」

「ハッターは止せ。主砲が全て完全に破壊されていることも、波動砲やデスラー砲に類する兵器も無いことも、我々の技術者が確認済みだ」

「確かに主砲は使えないし、波動砲ありません。それは分かっています」

「分かった。それが君の信仰であるならば止めない」

ベルデル艦の艦長が敬礼して通信を切った。

「よし、仕掛けてくるぞ。全艦戦闘準備」とユーライアス艦長はマイクに叫んだ。「残った対空機銃とミサイルを全て敵艦に撃ち込め。最後まで戦意があると装え。副砲の射撃が完了するまでの辛抱だ」

砲術長が振り返った。

「艦長」

「なんだ」

「本当に良いのでしょうか。あれは約束の地の太陽そのものです」

「ここに約束の地はもうない」

「約束の地はここに無いからどうだというのですか」

「次の責務を果たす必要がある」

「次の責務……」

砲術長は向き直って残った1門の副砲の照準を開始した。

そうだ。我々は神に誓った責務を果たさねばならぬ。

聖地に土足で踏み込む異教徒を殺せと神がいうのならば、その義務は実行されねばならない。

「ダメです。ミサイルは予想以上にダメージを受けていて、発射は二斉射が限界でした」

「機銃のビームのエネルギーが尽きました。予備がありません」

「砲術！」ユーライアス艦長は叫んだ。

「副砲、発射します」

そして砲術長はトリガを引いて、祈った。

他の者達も続いた。

「艦長。計算結果が出ました」とたった一人祈っていなかったハーマイオニーが叫んだ。「間違いありません。シャルバエルは銀河中心方向にまだ存在します。生存者の有無までは分かりませんが、惑星が残っていれば生存者もいると思われます」

ユーライアスは目を見開いた。

このまま脱出して彼らとの合流を目指す選択もあったのではないか。

だが既に手遅れだった。

次の瞬間、二隻の戦艦の集中砲火でハイドーは蒸発した。それは、ほぼ戦闘力を失った巡洋艦を仕留めるには過剰な砲撃であったが、手加減をする気はどちらの艦にも無かった。

むしろ、宗教に殉じた彼らに無用の苦痛を与えないように、一息に蒸発

させることを意図したと言っても良かった。ハイダーの乗員全員が、自分が死んだことを自覚する前に蒸発していた。

エピローグ

ドアがノックされた。

真田は顔を上げた。

「入りたまえ」

挨拶して入ってきたのは、部下の島次郎だった。

「島君か。しばらく一人にしろと言ってあったはずだが」

「緊急事態です」

「何があったのだね？」

「シャルバエルの主星が爆発しました。救援船団に至急出発を指示しましたが、全ての惑星を飲み込んでいて生存者は期待できそうもありません。星系内にいた全ての宇宙船も含めて全滅でしょう」

「あの星が爆発するなど、物理的にあり得ない」

「いえ。1つだけ可能性があります」

「ハイドロコスモジェン砲を主星に向けて撃ったとでもいうのかね？ 自分も死ぬのが分かっているのかね？」

「しかし、ハイドーはハイドロコスモジェン砲の技術で構成された軍艦で、主砲も副砲も全てハイドロコスモジェン砲です。あれだけの爆発を起こさせる原因としては、自分にはそれしか思い付きません」

「たとえ副砲1門であろうとも、主星に向けて撃てばこうなる……か。だが、ユーライアス艦長はけして自殺を望むような人物ではなかったぞ。そもそもシャルバートの教えは無駄な死を望まない」

「しかし、解釈に寄ります。意味のある死は望まれていると解釈する者もいます」

真田は黙って立ち上がった。

「真田さん？」島は驚いた。

しかし、真田は顔を島には見せずに部屋から出て行った。

その時、島は【シャルバエルの次は地球かもしれない】という根拠の無い嫌な予感を抱いたという。

真田が何を思ったのかを知る者はいない。

終わり（あるいは、宇宙戦艦ヤマト復活篇に続く）

解説

本作はアトランタをネタにしたヤマト小説を書いたのなら、ダイドーをネタにした小説も書かないとね、というシンプルな前提でスタートした。しかし、もの凄く多くの【偶然の一致】によって豊かな作品になった。

ダイドーをネタにするために、ヤマト世界に似た名前のものを探したところ、ハイドロコスモジェン砲が出てきた。

そこで、艦名はハイドーに決まり、運用者はシャルバート信者と決まった。温厚なシャルバート信者が戦闘艦で戦って良いのかって？ どんな宗教にも派閥があって、武闘派は存在するものなのだ。

そこで、ハイドロコスモジェン砲装備の防空巡洋艦というアンバランスな設定が出てきた。

抑圧されたシャルバート信者が混乱に乗じて建国して、それが戦争の火種になるというのはまるで中東戦争だなと思ったので、中東戦争をモチーフにすることを決めたがそうすると、アラブはウルップに似た語句だということに気づいたので、大ウルップ星間国家連合の前身としてアルブ連盟という設定をでっち上げた。もっともそこは逆で、そもそもウルップはアラブのもじりと思うべきだろう。

問題は地球の立場だが、ガルマンから独立を果たしたシャルバートに味方するか、デスラー側に味方するかを考えたが、シャルバート側に決めた。いくら古代とデスラーに友情があっても、古代本人に発言力がないのではどうしようもない。

ちなみに、ハイドーの正式名称は防空巡洋艦ハイドー級 1 番艦 HMS ハイドーである。同型艦はない(竣工前に消えた)。

HMS は Hyperspace Mother shalbart Ship (マザー・シャルバートの超空間船)の略である。

艦長ユーライアスの名前はダイドー級のユーライアスからもらったものだ。ヒロインのハーマイオニーもダイドー級の艦名からもらったものだ。ここは、数年前に流行った魔法少年ものの小説、映画を元ネタにしたわけ

ではないという皮肉が楽しいので採用した名前だ。

ハーマイオニーが鬼娘である理由は、名前にオニの二文字が含まれるからだ。

副長の名前はナイアドと設定したが名前は登場していない。これもハイドー級の艦名からもらった名前だ。

地名はイスラエルをシャルバエル。エルサレムをシャルバレムに読み替えた。

タイトルは、ひたすら胎動篇をハイドー編に読み替えてあるだけだ。それだけでは分かりにくいので、【銀河中東戦争】の語を補ったが、これは【中東戦争】と【銀河百年戦争】の合成である。

本作のハイドロコスモジェン砲は、【本来恒星を吹っ飛ばす悪魔の兵器】という解釈で書かれている。地球を救うために使った使い方は、オマケのようなものだ、という解釈だ。

ラムイス教はイスラム教のもじりであるが、名前が似ているだけで中身は関係ない。ちょうどヤマト III で死んだラム艦長もいることなので、ラムイス教のラムはラム艦長のラムと解釈した。するとイスが浮くので、その場限りのイス将軍を創作した。

いずれにしても、本作の宗教はその場限りのでっち上げで、イスラム教ともユダヤ教とも関係が無い。教義は、物語の都合で創作されたもので、他のいかなり宗教とも同じではない。また、本作の全てはフィクションであり、宇宙戦艦ヤマトの正式な解釈では無いし、正式な解釈に準拠したものでもない。

ストーリー的に言うと、この小説のポイントは以下の通りだ。

- デスラーを登場させない
- シャルバエルを綺麗さっぱり消す
- ハイドーを綺麗さっぱり消す
- 復活篇の前哨戦をやる
- しかし、その情報は一切地球に届かない

つまり、地球はシャルバエルを支援したが、なぜか復活篇の前に綺麗さ

っぱり消えてなくなり、地球はその理由を知らなかった、という形で決着させたいのだ。そうしないと思っても寄らぬ敵に攻撃される復活篇の展開につながらないのだ。

さて、アトランタ、ダイドーの次は秋月型をヤマト世界にでっち上げた小説かと思う読者もいると思うが、それはない。ヤマト世界には、既に冬月が定番として存在しているからである。【コスモ長 10 センチ高角砲】を振りかざして敵機を制圧する防空駆逐艦の勇姿を書く予定は全く無い。

遠野秋彦作品宣伝 2016/5/16 版

小説・超絶無敵ロボ オメガナイン殺人事件 【Kindle 版】

<http://www.amazon.co.jp/dp/B01DU7JXFM>

地球はヒーローにしか守れません。でも、基地で起こる殺人事件の犯人なら高校生でも追い詰められます。

小説・国際お助け隊 【Kindle 版】

<http://www.amazon.co.jp/dp/B01DVJCAIG>

東西冷戦の終結で職を失った女パイロットはバイクに乗って旅に出る

小説・電子出版殺人事件 【Kindle 版】

<http://www.amazon.co.jp/dp/B01E25PCNS>

電子出版黎明期、男達は電子出版の是非を激論する。

小説・電子商取引殺人事件 【Kindle 版】

<http://www.amazon.co.jp/dp/B01E380GO4>

デスマーチの開発プロジェクトを管理する女性は叫ぶ

小説・Windows 殺人事件 【Kindle 版】

<http://www.amazon.co.jp/dp/B01E565RCA>

1994 年当時の幻の短編 2 本【Windows 殺人事件】と【Windows 誘拐事件】が蘇る

小説・おなじい　～幼馴染の爺ちゃんはまだ恋に落ちていない～【Kindle 版】

<http://www.amazon.co.jp/dp/B01EC86V1C>

冷凍睡眠から目覚めた未来は、謎に満ちていた

小説・クラッシャー象・連邦惑星サピンの危機【Kindle 版】

<http://www.amazon.co.jp/dp/B01ECG523C>

凶悪犯罪者エレファントに名探偵シャドウが迫る

小説・火星の地底世界バルシター　【Kindle 版】

<http://www.amazon.co.jp/dp/B01ECYO3XO>

死んだオタクは未来の火星に転生した。

小説・女性新人社員よ人気 RPG 開発現場に突撃せよ【Kindle 版】

<http://www.amazon.co.jp/dp/B01EDWY5IS>

勇んで乗りこんだゲーム開発現場は大惨状!?

小説・神さまインフレーション【Kindle 版】

<http://www.amazon.co.jp/dp/B01EE8CUJW>

神さまが僕に何でも願いを叶えるゲームを提案してきた

遠野秋彦短編集 1 ・フルボッコちゃん 【Kindle 版】

<http://www.amazon.co.jp/dp/B01EK6CXUY>

上司をフルボッコにする夢を叶えます